

『丸山眞男座談』に戦争と平和を「聞く」(下)

植村秀樹

はじめに

一 丸山眞男と座談

二 座談を「聞く」

(一) 終戦から安保まで (以上、前号)

(二) 安保から退職まで

(三) 補遺——その後

三 考察——何が「落ちた」のか  
おわりに

## (二) 安保から退職まで

前節では一九六〇年の日米安全保障条約の改定をめぐる闘争以前の座談における丸山の発言を聞いてきた。このいわゆる「六〇年安保」は丸山にとってもきわめて重要な意味を持つ、大きな契機となったと考えられる。しかし、丸山にとって安保は外交・安全保障政策上の問題というよりも、むしろ民主主義と憲法の問題であった。安保闘争に関して、何よりも「(五月)二十日が決定的な転換点だと思った」と述べている。<sup>(43)</sup> しばしばいわれた「重い」安保が岸信介による強行採決を機に一気に動き出したことを確認する発言といえる。それは、「憲法感覚」というものが、戦後十数年の間に国民生活の中にちりばめられて定着しているという前提がなければ、ああいう巨大な盛り上りは考えられない。その痛覚みたいなものに、二十日の事件が触れた」という解釈である。<sup>(43)</sup> ここで、安保闘争を動かしたものが外交・安全保障ではなく「憲法感覚」であったとしているように、丸山にとつての関心はここにあった。

ぼくの考えは、日本国憲法は発生経過からいえば、何といつてもアメリカによって日本の支配層に押し付けられたものだ。今度の安保もアメリカの極東政策によって日本国民に押しつけられたものだ。新日本国憲法の背後には、国連憲章があり、国連をつくった世界の反ファシズム勢力があった。アメリカの政策が百八十度転換した十五年の過程は同時に、一方では、政界・官界・財界等パワー・エリートにおいて旧勢力がもりかえし、憲法を邪魔者扱いにして行った過程でもあり、他方では、まさにそれと併行して、憲法感覚が広く国民の間に滲みとおって行った過程でもあるわけです。この二つの過程のズレあるいは矛盾が爆発したのが、今度の新安保問題で、だからこそ新安保の問題は外交よりもむしろ内政の問題であるといわれるわけです。ですから、人民主権の血肉化を通じて国会を国民のものとし、その力で、アメリカの

極東政策を再転換させる地点に今立っているのだと思います。<sup>(44)</sup>

しかしながら、本稿の関心たる座談会では戦争や平和に関するものは決して多くはなく、丸山自身の戦争体験に触れることも少なくなり、また原理的な認識を披瀝した発言は少ない。注目すべきものとしては、絶対平和主義に対する次のような発言がある。

平和ということ、そのことがぼくは逆説的なものだと思うんですよ。スピノザが「平和とは争いのないことではなくて逆である」といった。つまり争いが無いということなら、いわゆる「奴隷の平和」だってありうるのであって、極端に言えば、羊のように飼い慣らされている人民と暴君の間にも平和があるといることになるのですね。その意味では、あなたの言われるように平和が自身に争いの契機を含んでいる。しかし、同時に平和は闘争に対しての闘争という面ももたなければ、他の政治行動とどこが違うか。政治という人間の行動の本質的な契機はコンフリクトですよ。つまり闘争ですよ。<sup>(45)</sup> (傍点は原文。以下同じ。)

その一方で、一九五〇年の平和問題懇話会の「三たび平和について」以来の平和共存への関心はなお強く、また、この点について、ソ連側を高く評価している。「第二次大戦後の歴史からいえば、平和共存のイニシアティブをずっと取ってきたのはソ連側であって、西側のほうは、はじめの間は、このコトバは共産側の宣伝だといってはなはだ冷淡だったのが(略)止むなく平和共存を認めざるをえなくなったというのが現実のプロセス」と見ており、「どうして西側は平和共存を認めるのがおくれたのか」との疑問を投げかけている。<sup>(46)</sup> こうし

たソ連ないし国際情勢の認識については、ここではひとまず紹介にとどめておく。

六〇年安保の重要性と丸山の活動におけるその意義を考えると、この問題に対する丸山の対応をここで見ておかないわけにはいかないだろう。そこでしばし『座談』を離れて、安保の時期に多かつた講演を聞いてみよう。一九六〇年五月十九日深夜の強行採決の前後に講演などの機会が急増えた。そこで丸山が強調していたのは、先にも触れたように、岸による強行採決とその意味である。「あの十九日から二十日の早晩にかけて衆議院で政府与党の一部によって強行された一連の事柄、そこから起こってきたさまざまな事態」<sup>(47)</sup>の意味を一連の講演で執拗なまでに問い続けている。強行採決前の五月三日の講演では、「みんながなんにもしなかったら、逆にそのなんにもしないという現実がどんどん積みかさなって、それ自体社会を一定の方向に押しすすめていくとして、不作為の責任を戒め、「この状況のなかで、私たちはどういう態度決定というものを迫られているか」を問うた。<sup>(48)</sup>これ以後、積極的に発言をするようになる。正確を期すならば、要請に応じるようになったというべきであろうか。

このように、丸山にとって安保改定の問題は、あくまで憲法と民主主義の問題であった。繰り返しになるが、講演でも常に強調したのは、岸政権による強行採決とその意味であった。採決直後の五月二十四日の講演でそれを次のように述べている。

私は安保の問題は、あの夜を境いとして、あの真夜中の出来事を境いとして、これまでとまったく質的に違った段階に入った、すべての局面は、あの時点の前と後とで一変したということから、私達の考え方と行動を出発させるべきではないかと思えます。(略)

すべての局面は、あの日を契機として一変したと思うのです。(略)

もし私たちが、十九日から二十日にかけての夜の事態を認めるならば、それは、権力がもし欲すれば何事でも強行できること、つまり万能であることを認めることになります。権力が万能であることを認めながら、同時に民主主義を認めることはできません。一方を否認することは他方を肯定すること、他方を肯定することは一方を否認することです。これが私たちの前に立たされている選択<sup>(49)</sup>です。

同じことを七月八日にも話している。この時点ではすでに新安保条約の批准は終わり、新条約は発効していた。だが、丸山にとってそれは大きな問題ではなかった。

私は五月十九日の強行採決で問題の局面が一変したと思う。(略)五月十九日を契機にむしろ問題が単純化したと考える。(略)

安保通過を既成事実として認めその上で問題の処理を考えるといいのか、たとえ安保には賛成でも議会の政治の根本ルールを無視したやり方は認めない、あの採決はご破算にすべきだという考えに立つのか、これが敵、味方の論理としてハッキリした。<sup>(50)</sup>

これら二つの講演の間に行われた講演は、さらに注目すべき発言を含んでいる。六月十二日に開かれた憲法問題研究会主催の講演会での「復初の説」と題する講演において丸山は、「復初」すなわち「初めにかえる」ことを主張した。この「初め」を丸山のその当時の発言と比べてみると興味深い。これは丸山を理解する上で重要なことと思われる。

初めにかえるということは、さしあたり具体的に申し上げますならば五月二十日にかえれ、五月二十日を忘れるなどということがあります。五月二十日を忘れるなどということは、単にあのとき起った事実を頭の記憶にとどめておけ、ということではありません。五月二十日の意味、その意味を引き出せ、その意味を引き続いて生かせということです。(略) 五月二十日の意味をこういうふうに考えますと、さらにそれは八月十五日にさかのぼると私は思うのであります。初めにかえれということは、敗戦の直後のあの時点にさかのぼれ、八月十五日にさかのぼれということでもあります(拍手)。私達が廢墟の中から、新しい日本の建設というものを決意した、あの時点の氣持というものを、いつも生かして思い直せということ(略)<sup>(5)</sup>

「八月十五日」について確認しておこう。既に述べたように、丸山にとつての実際の八月十五日はこういうものではなかった。「簡単にいえば、やつと救われた」という氣持、ワーツと思ひ切りの、ひをした<sup>ひ</sup>氣持」だったのであり、その翌日ないし翌々日には友人と顔を合せて、「どうも悲しそうな顔をしなけりやならないのは辛いね」と話しあったのであった。「復初」とは實際上の「はじめ」に戻ることではなく、理念上の「戦後」の出発地点を創作する意図を持ったものであったということである。そして、丸山の「八・一五」観は、次のような地点にまで行き着く。

私は八・一五というものの意味は、後世の歴史家をして、帝國主義の最後進国であった日本、つまりいちばんおくれで欧米の帝國主義に追隨したという意味で、帝國主義の最後進国であった日本が、敗戦を契機として、平和主義の最先進国になった。これこそ二十世紀の最大のパラドックスである———<sup>(6)</sup>—そういうわけにあると思います。そういうわけするように私達は努力したいものであります。

ところで、丸山自身が述べているように、一九五七年の論文「日本の思想」は、丸山にとって思想的なし  
学問的関心の大きな転機となるものであったようである。この前後に執筆した論文と講演をまとめた『日本の  
思想』の「あとがき」で丸山は次のように述べた。

ここには、よかれ悪しかれ、私が大学卒業以来当面したさまざまな学問的課題と、それを追求する過程  
で不可避免的に刻み付けられた思想的、道程とが流れ込んでおり、それと同時に、これ以後の関心方向の新た  
な起点ともなった。<sup>(53)</sup>

実はこの前後に丸山は「スランプ」に陥っていたという。座談会の席で丸山は「ほんとに、この一、二年と  
いうもの、精神的にスランプを感じるんです」と話していた。<sup>(54)</sup>「日本の思想」の執筆とスランプとはほぼ時期  
を同じくしており、「日本の思想」は丸山に転機をもたらす契機となったのであろう。

さて、六〇年安保では八面六臂の活躍——「夜店」が大繁盛——をした丸山だが、その後は、安保問題につ  
いての発言はぐっと少なくなる。池田勇人内閣の登場とともに、世間の関心は経済成長に集まっていたからと  
いうこともある。全共闘による批判の対象となるまでの間、丸山には静かな時がやってきたようであった。

六〇年代の半ばから大学に全共闘運動が芽生え、急速に広がっていった。「進歩的知識人」は批判の的とな  
り、丸山はその最大の標的のひとつとなった。この時期のもので聞き逃してはならないものに丸山自身の原爆  
体験をめぐる話があるが、これは座談におけるものではないので、後にしよう。

六〇年安保の後、論壇では「現実主義」と称する立場の議論が注目を集めるようになっていたが、これに対  
して、丸山は次のように述べている。

現実主義といわれているのは、まず第一に主義ですからね。あれはほくにいわせればひとつの思想なんです。いわゆる現実主義者が現実をつかまえる方法を提出しているわけじゃない<sup>(55)</sup>。

この点は筆者もまったく同感である。現実主義というのはあくまで一つの立場の表明にほかならず、現実主義者が必ずしも現実を的確に把握しているというわけではない。と同時に、反対に、理想主義者は現実を無視していると直ちに結論づけることもできないということにもなる。これに関連して丸山は、同じ座談の中で「戦後民主主義がどんなにチャチなものであろうと、その中から可能性をひきだしてくる以外にわれわれの未来はないんだ」と、自らの立場を鮮明にしている。また、現実主義に対して力を込めて反論した発言もしている。「そういう新しい傾向がでてきたということを非常にいいますけれども、それについても私はそうたいして騒ぐに値するか疑問なんです」として、次のように言う。

およそ政治学者だったら、そんな程度のリアリズムなど承知のうえで、あえて一つの選択と決断をうち出しているのに、まるで素人の観念的平和論ばかり過去に横行していて、それに対して現実主義者たちは新しい考えを代表しているといわんばかりの紹介の仕方は、(略)いいかげんなホラか、露骨な仲間ぼめだということがわかるはずだ。(略)「現実主義者」たちはさかんに、革新的知識人の「観念論」の無力さというけれども、皮肉なことに、現実の権力者がいちばんいやがり、あるいは恐れているのはまさに「観念的平和論」なんですね。もしそんなに無力なものなら、ほつといてもよさそうなものなのに、やっきになり、目の敵にしていること自体、そういう『観念論』が日本の政治状況の無視できない構成要素——しかも権力から見て好ましくない構成要素になっていることを証明している。(略)「現実主義者」と



いうのは、「現実」によって影響される人ということ、<sup>56</sup>「現実」に影響を与える人じゃないんです。むしろおおよそ「観念的」な革新派の存在によって、また、アメリカの世界政策への反対運動によって、まさに歴代内閣やアメリカの対日政策は影響されている。こんな皮肉な逆説はないと思うんです。<sup>57</sup>

「観念的」と批判されることの多い平和論をむしろ政府は恐れ、その半面、現実主義者は実際には政府に何らの影響も与えておらず、逆に現実には、すなわち権力に影響を受けるだけだというのである。これは現実主義(者)の一面を確かに衝いている。

と云って、丸山は革新派を手放して称賛しているわけではない。

だからといって革新派がこのままでいいとはむろんいえない。革新勢力の『体質』について、そのステレオタイプの考え方について、いくらきびしく批判してもしすぎることはない。<sup>58</sup>

このあたりの革新派への批判を大いに聞きたいところであるが、これ以上の展開は聞かえてこなかった。

### (三) 補遺——その後

一九七一年三月、丸山は定年を待たずして東京大学を辞職した。全共闘に厳しい批判を受けるなどしたことも影響して体調を崩したこともあったが、日本政治思想史の研究に専念したいという思いが強かったことがその大きな理由であった。この頃には自分の戦争体験を語ることはほとんどなく、また国際政治や平和について論じることがほとんどなくなっていた。

過去を振り返つての発言でも、目を引くようなものは多くはない。亡くなる前年の一九九五年、前節で触れた六〇年安保を回顧して、「一九六〇年五月一九日の強行採決は、今から考えられないくらいシヨックでしたね。それは国民的にも言えるのじゃないですか。文字通り、連日何十万の市民が国会をとりまいたんですから」、「あの時、言ったり書いたりしたことは、本店でも夜店でもなく、一市民としての言動なんです。一市民として怒り心頭に発したというのは事実<sup>59</sup>」と述べている。以前話していたことの繰り返しであるが、やはり、外交や安全保障の問題としてではなく、民主主義の問題として、強行採決に対する「一市民として」の怒りから出た行動だったというのである。

ところで、丸山の発言を理解する上で重要なポイントと考えられるものひとつに、知識人と大衆、あるいはエリートと庶民という、二項対立的に捉えられる問題がある。本稿の関心である平和論とは直接的につながるようには見えないかもしれないが、実はきわめて重要であると思われる。

政治学者・岡義武をめぐる篠原一、三谷太一郎との鼎談で丸山は次のように言った。

マス、大衆というものにイカれたというか、大衆の動向が歴史を動かすという面を重視した人は、マルクス主義者をふくめて大体は転向しました。天下滔々として全体主義の潮流が支配的になっていったわけでしょう。<sup>60</sup>

丸山はマスではなくパブリック、つまり「自覚した市民」に信頼を置いていた。逆にいえば、大衆に対する抜きがたい不信感を持っていた。これは丸山を厳しく批判した吉本隆明と鋭く対立する点であり、また、思想の科学研究会などで交友のあった鶴見俊輔とも異なる点である。

丸山は『丸山眞男座談』とは別に『丸山眞男回顧談』を残している。一九八八年から九四年にかけて、丸山の弟子である松沢弘陽と植手通有の二人が中心となつて行つた聞き書きをまとめたものである。『丸山眞男集』の刊行準備に取り掛かつた二人が「丸山先生の著作の時代的背景を知るために」提案したことからはじまつた。これに対して丸山が、「信頼できる人に、自分のことを含めて気軽に語っておくのも意味があるのではないか、嫌な言葉だが、時代の証言として一つの資料になるかもしれないと考え」て引き受けたのがこの『回顧談』である。<sup>(61)</sup>しかし、話のかなりの部分が東大法学部の内輪話に割かれてしまつており、これで「時代の証言」といえるであろうか。本稿の問題意識からしても収穫の乏しいものである。その原因は丸山ではなく聞き手にあると思われるが、せつかくの機会がこのようなことに費やされてまつたのは残念至極である。余談ではあるが、戦時中の東大法学部は(経済学部とは対照的に)軍部に対していくぶんなりとも抵抗の姿勢を示しており、そのためあつて、丸山にとつて居心地の良いところであつた。もつとも、その分、「戦後の自己批判が足りない」とも見ていたのであるか。<sup>(62)</sup>丸山が平和問題談話会や憲法問題研究会などに関わつたのには次のような認識があつた。

そのときは明らかに、研究者としての自己批判の意識がありましたね、象牙の塔にこもつていいのかという。それと、東大法学部に対する批判意識もあつたように思います。そのころ、法学部の教授たちはたいへん威張つていた。戦時中、経済学部とは違つて法学部は、一応抵抗したわけです。といつても、内側から見ていると、上の二、三人がしつかりしてただけで、あとは日和見で、くつついていただけなんです。それでも、嵐の中で頑張つたというのが全体の意識でした。そういう意識が、逆にその後の法学部の改革を難しくする大きな壁になつたと思います。<sup>(63)</sup>

このような目を持っていたとはいえ、東大法学部に対する丸山の信頼は揺るがない。「東大法学部に対しては、ほとんどのような者を探ってくれたという点で、感謝こそすれ、恨みはない。法学部に泥をかけるような辞め方はしたくなかった」と言っているが、個人的な「感謝」だけでなく、大きな信頼を寄せていたことは明らかであろう。このあたりは、知識人と大衆、あるいはエリートと庶民についての丸山の認識に大きな影響を与えていると考えて間違いないと思われる。あとで丸山と交友の深かった鶴見俊輔の話も聞くことにするが、丸山と鶴見は実に対照的である。

「東大法学部というのは、頭が良くて——まあ頭と言っても記憶力なんです、記憶力だけが優れて志のない若者が集まる学部なんです」と、しばしば丸山は東大に対して批判的に言及することもあった。しかしながら、竹内洋は、丸山がファシズムや軍国主義に関する論文をいくつも書いていながら、その一翼を担った矢部貞治や蠟山政道などの「東京帝大教授の動向についてほとんど言及していない」ことを指摘している。「特殊主義を非難し、普遍主義を唱えながら、所属集団（東大）については例外とする処理の仕方こそが日本的病理ではないか」というのである。<sup>(65)</sup> 本稿の関心からすれば、戦後知識人のあり方という点で、またそれが平和論とも無関係ではありえないという意味において、看過できないが、それはさておき、もう少し、重複を厭わずに『回顧談』の丸山の話聞いてみよう。

平和問題懇話会で「三たび平和について」を出した時、民法学者の磯田進は「軍備のない国家はない。軍備がないというのはおかしい」とこれを批判した。岩波書店を舞台とする丸山の活動に深くかわっていた大内兵衛も、「国家である以上は、完全非武装といのはありえない」という、いわば常識的な考えであった。これに対して丸山は次のように考えた。

そこでぼくは、こうなったら国家観念自体を革命する以外にない、今日の言葉でいえば、つまり小沢一郎ばりの「普通の国家」論で言えば、軍備のない国家はないんだろうけれども、憲法第九条というものが契機になって一つの新しい国家概念、つまり軍事的国防力というものを持たない国家ができた、ということも考え得るんじゃないかと言って、磯田君と議論したのを覚えています。<sup>(67)</sup>

六〇年安保についても、最後まで内政問題として、民主主義の問題として丸山が捉えていたことをあらためて確認しておこう。

ふつう、大衆運動が盛り上がっていった頂点に六〇年安保があったというふうに考えられがちですけれども、そうではない。突如としてあの大爆発になった。アクティブな知識人や学生の見方からすると「ついにここに来た」、つまり多年の努力が実って六〇年の大爆発になったというのですが、いわゆる普通の市民と接触しているほくらから見ると、五月十九日の強行採決によって突如大爆発が起きた。<sup>(68)</sup>

そして、東大を退職するころについては、次のような実に興味深い感慨を吐露している。

あるときから、ぼくには学生を見る目がなくなつたという気がするようになったのですね。人間予測の力がなくなつたと感じるが多くなつた。全共闘のときなどは、その続きでしょうね。いろんな意味で予測を誤つた。非常に古い目で見ていたんですね。<sup>(69)</sup>

### 三 考察——何が「落ちた」のか

座談の場における発言を中心に丸山の話聞いてきた。戦争体験は戦後の平和論を考える上で重要な要素ではあるものの、丸山自身は軍隊時代のことをあまり書き残しておらず、また、戦争や平和についてまとまった著作を残しているわけではない。にもかかわらず、戦後平和論を語るうえで丸山はやはり外せない存在感を持っている。こうした事情から、座談における発言に漏れ出るものに耳を傾けてみようと考えたからであった。こうして聞いてきた話について何がしかの考察をめぐらせたいが、その前に、もう少し、丸山の話をおこう。それは、ソ連についての発言と丸山自身の原爆体験をめぐめるものである。

前節で、平和共存の道を探ろうとした丸山が、その点でソ連を高く評価していたことに触れた。一九五三年には次のような発言もしていた。

たしかに相対的には、資本主義側からの危険の方から現実には大きいし、体制の問題として見たら、ソ連や中共側に戦争を起す本質的内在的な要因がないということも認めますが（略）

コミユニズムの論理では、やはり植民地解放戦争のような正義の戦争というものを認めているのですが、現在のように戦争の惨禍が測り知れなくなると、もう正義・不義の区別自体が非現実的になってくるのではないか。たとえば朝鮮戦争の場合についても、あれほど何百万の罪もない民衆が殺されたり、家を失ったりしたという現実の前には、どんな「大義」も沈黙せざるをえないと思います。荒廃した国土の上で立つて、これで集団安全保障の原則が貫かれたということがナンセンスであると同様に、やはりこれで民衆の解放が成ったと言ってみたとところで、空しい言葉でしかない。

(略) 実際にレーニンやスターリンのような偉大な指導者は同時に最も現実感覚の豊かな外交家だったわけですが(略)<sup>(70)</sup>

共産主義者ではなかったにもかかわらず、ソ連に対する見方は甘かったと批判されても仕方がないであろう。ただし、この発言がスターリン批判以前のものであることには留意が必要である。しかし、ソ連に対する丸山の評価——といって差支えがあるならば、好感と言ひ換えてもよい——は、次のような発言にも表れている。これは『批評』第六号(一九六〇年一月号)に掲載された座談会におけるものであり、少なくともスターリン批判を経ており、ソ連の内情についてもある程度わかっていたはずである。

相当高度の文化というものを前衛が責任を持って人民に享受させているわけですね。音楽で言えばバッハなりベートーヴェンの鑑賞能力をもった大衆が世界中で一番多いのはソヴェトじゃないかと思う<sup>(71)</sup>。

もう一点の原爆体験については、一九六九年に詳しく語っている。丸山は自分が広島で被爆したことは近親者以外には話さなかった。それが初めて公になったのは『現代政治の思想と行動』の英語版(Oxford University Press, 1963)の著者紹介においてであった。六九年というのは、もともとは『中国新聞』のインタビューである。ここで丸山は自身の被爆体験を詳細に語りつつも、次のように言う。

戦争後に、あれだけ「戦争」については論じたのですけれども、「原爆」ということの持つ重たさというものを論じませんでした。

こればかりは、もう無理に意味をでっちあげてもしょうがないことで、やっぱり自分の中にずーっと、こう……発酵させていく。たまったものを発酵させる以外に、本当のものは出てきませんからね。<sup>(73)</sup>

丸山にとっても、原爆は「戦争の惨禍の単なる一ページではない」、文字通り筆舌に尽くしがたい体験であった。<sup>(73)</sup>一九八三年に広島島の医師にあてた葉書でも丸山は、「私は原爆体験をすでに思想化していると思うほど不遜ではありません」と強い調子で書いている。<sup>(74)</sup>

こうして丸山の発言を理解するためには、あらためて知識人というものについて考えざるをえないということに行き着く。そこで丸山と深い交友を持ちながらも丸山とはタイプの異なる知識人の典型でもある鶴見俊輔の話に耳を傾けてみよう。鶴見は二〇〇三年に上野千鶴子、小熊英二の二人による長時間の聞き取りに応じている。<sup>(75)</sup>ここで鶴見は、丸山を考える上でも重要な発言をしている。

近代日本の知識人についての鶴見の考えは次の発言に端的に表されている。

明治以後の日本では、知識人というのは欧米の知識の体系を身につけた人間でなくちゃならない、そういう人間が指導者になって国を近代化しなきゃいけない、そういう人間は一高や東京帝大を出た人間だ、という回路ができてしまった。そういう合意のもとに、人材を大量に促成栽培した。それで、学校に試験で入って一番で出て、欧米の知識を並べて話せる人間が、権力の座につけるといいう仕組みができた。

そうすると、みんな知識人になろうとして、試験で模範答案を書こうとする。だから自由主義が流行れば自由主義の模範答案を書き、軍国主義が流行れば軍国主義の模範答案を書くような人間が指導者になった。そういう知識人がどんなにくだらないかということが、私が戦争で学んだ大きなことだった。<sup>(76)</sup>



ここでいう「学校エリート」としての知識人は「学校制度そのものから出てくる」と考える鶴見は、続けて次のように言う。

そういう制度のなかで百点をとるのは、先生が思っているとおりの答えをうまく察して、『はいはいっ』で手を挙げて答えた奴だ。そういう優等生は、中学生になっても、高校生になっても、大学生になっても、常に違う先生に対して手を挙げる。自由主義の先生にも、軍国主義の先生にもね。<sup>(17)</sup>

これを聞いて「私は東京大学で教えていますけど、確かにそういう学生が多いですね」と上野が受けたのに続けて鶴見は、「そういう人間が集まった例が、東大新人会なんだ」と言う。このように鶴見は、常に優等生であろうとすると行動する「学校エリート」としての知識人——これを「一番病」と呼んでいる——に対してきわめて厳しい評価を下しているが、丸山がこの「一番病」の範疇に入るといつているわけではない。丸山はむしろ、こうした「一番病」にはきわめて批判的であったと見て間違いなからう。

異和感なんでものじゃなくて、当時むしろ憎しみと軽蔑をもったのは、やはり戦争中羽ぶりのよかった知識人に対してですね。その感情は今日自分でも追体験できないほど激しかった。<sup>(18)</sup>

丸山の激しい憤りが伝わってくる。「学校エリート」に対する丸山と鶴見の視線には、このように共通点も一部には見られる。しかし、ここから先で二人は分かれる。

私が戦争体験から得たことというのは、一つはこういう考え方なんだ。大学を出ている人が簡単に転向して、学歴のない奴のほうに自分で考える人がいる。渡辺清とか、加太こうじとか、小学校しか出ていないような人のほうに、自分で思想をつくっていった人たちがいる。<sup>(79)</sup>

私が低く評価しているのは、日本の知識人とか政治家なんだ。とくに一高とか東京帝大を一番で出たような連中。<sup>(80)</sup>

鶴見は「(こうした人たちには、日本国憲法は)わからないと私は思っている」、「この憲法をあの連中(知識人)が支えられるだろうか、ということだ」<sup>(81)</sup>。このあたりから丸山と鶴見はやや異なってくる。一九四七年の講演「日本ファシズムの思想と運動」で示した見解に注目したい。<sup>(82)</sup> 座談ではないが、重要な点なので少し立ち入ってみよう。この講演の中で丸山は、ファシズムの担い手としての「小ブルジョア層」「中間層」について論じている。日本においてもドイツやイタリアと同様にこの層に属する人々がファシズムの担い手であったとしているが、「日本におけるファシズム運動も大ざっぱにいえば、中間層が社会的な担い手になってい」と、そこで「二つの類型」に注意を喚起している。第一の類型に属する者は、「小工場主、町工場の親方、土建請負業者、小売商店の店主、大工棟梁、小地主、乃至自作農上層、学校教員、殊に小学校・青年学校の教員、村役場の吏員・役員、その他一般の下級官吏、僧侶、神官」といった人々であり、これを「疑似インテリゲンチヤ」あるいは「亜インテリゲンチヤ」としている。これに対し、第二のグループを「本来のインテリゲンチヤ」と呼んでいる。これには「都市におけるサラリーマン階級、いわゆる文化人乃至ジャーナリスト、その他自由知識職業者(教授とか弁護士とか)及び学生層」としている。注目すべきは、「学生は非常に複雑で

ありまして第一と第二と両方に分かれてますが、まず皆さんは第二類型に入るでしょう」と述べていることである。第二の類型たる「本来のインテリゲンチヤ」について、丸山は次のように言う。<sup>(83)</sup>

第二のグループは、われわれがみんなそれに属するのですが、インテリは日本においてはむしろ明確に反ファッショ的態度を最後まで貫徹し、積極的に表明した者は比較的少く、多くはファシズムに適応し追随はしましたが、他方においては決して積極的なファシズム運動の主張者乃至推進者ではなかった。むしろ気分的には全体としてファシズム運動に対して嫌悪の感情をもち、消極的抵抗をさえ行っていたのではないかと思います。<sup>(84)</sup>

この区分に従うならば、鶴見が高い評価を与える渡辺清も加太こうじも「亜インテリ」ではなからうか。「本来のインテリ」の中に丸山が「憎しみと軽蔑」を抱いた人たちがいたとしても、基本的に知識階級に対する丸山の信頼は実に厚いものであったといえるだろう。丸山は知識人として、ある種の知識人たちを批判したのであって、庶民・大衆の視点からの知識人批判ではない。その一方で、丸山と鶴見の違いを示すのは次のエピソードである。ある時、丸山は、「鶴見さん、あなたは大衆をほめるけれど、それはあなたが育ちがよくて知識人だからですよ」、「君が貴族的だからそう考えるんだよ。僕なんか、近くの貧民窟の人たちと一緒に落語を聞いていたんだ」と鶴見に向かって言った。丸山は「自分は庶民だと思っていた」<sup>(85)</sup>のこののである。ここで概念を整理しておくと、〈知識人・大衆〉と〈貴族・庶民〉という二項対立があり、丸山は知性においては知識人であり、生活においては庶民であり、対する鶴見は知識人にして貴族ということである。

鶴見の話の中から、興味深い部分を紹介しておこう。

「どこを切っても『公』のことを憂えているようなことしか出てこない人間というのは、好きじゃないんだよ。……どこを叩いても『公』のかたちが出てくるっていうのは嫌いなんだ。そういうタイプの知識人は、まったく明治以後の学校教育の賜物だと思っている」と鶴見が言うのに対して、上野が、「丸山眞男さんなんて、どこを叩いても『公』しか出てこないような文章を書いていたと思いますか」と問うと、鶴見は「書くことはね。彼は書くとなるとすごく慎重で、抑えていたから」と応じている。人物としての実像は「書くこと」とは別のところにあつたという意味に解せよう。

「丸山さんは、内側に狂気を抱えていた人だったと思うね。彼の家系も、そういう気質の人が多いんだ」、「丸山さんは、政治は結果責任だとか、自分はプラグマティストだとか、口ではそう言っていたけど、本人は全然そういう人じゃないんだよ」、「丸山さんは、あれで軍歌とかがわりと好きだったんだよ」などと鶴見は語っている。<sup>(87)</sup> 付き合いの長い鶴見の言葉であるだけに、論文などからではうかがうことのできない丸山の一面を示すものであるう。

丸山が生活においては鶴見のような上流階級でなく、庶民階級に近かつたとしても——後に述べるように、弟の丸山邦男は異なる見方をしているが——丸山がまぎれもなく「学校エリート」にして知識人であつたことにより、大衆との間に相容れない何ものがあつたとしても不思議ではない。「貧民窟の人たちと一緒に落語を聞いていた」丸山は、となりの席にいた庶民にして大衆である人々との間にある見えない壁をどう思つたのであろうか。

丸山の話の聞いている中で、気になった言葉がある。それは「ざまあみやがれ」である。終戦をめぐって、一九六〇年に次のような文脈で登場する。

解放感の大きさは今日想像できないくらいです。アメリカの軍事占領に対して甘かったとか、いわれるけども、あとからいえばその通りだが、実感からいうとそんなもんじゃないんだな。アメリカであれ何であれ、本当に解放された、ざまア見やがれという……<sup>(88)</sup>

ここでは軍国主義(者)の敗北に対して発せられたものと解することができよう。これは理解できる。しかし、気になるのは、別のところで発せられた「ざまあみやがれ」である。一九六八年のことであるが、丸山はインタビューに応じて次のように語った。

どこへでもいい、羽田からジェット機が日本の土を離れた瞬間にいつも——といってもそう何べんもの経験じゃないけれど——と、たんに気分爽快になり、誰に向かってというでなしに、「ざまあみやがれ」と叫びたくなるんです<sup>(89)</sup>。

これは次の言葉に続いて出たものである。

私は土着的とか日本的とかいう言葉にはほとんどアレルギー的反応をおこすんです。いくら西洋主義者といわれようが、そういう感覚だから、うそをつくわけに行かない。

丸山は「誰に向かってというでなしに」と言うのであるが、こういう言葉は対象もなしに発せられるものではないだろう。では、誰に——あるいは何に——向かって発したのだろうか。具体的な人を思い浮かべてではな

いにしても、察するに、丸山のいう「亜インテリ」や非インテリ、つまり、丸山ら「本来のインテリ」を除く大多数の日本人がその対象となるのではあるまいか。「西洋近代主義者」であることを自認していた丸山は、日本人でありながら常に日本（人）を外——すなわち西洋——の目で見ていたのである。

これと対照的なのが、先に触れた弟の邦男である。五十代も半ばを過ぎてから、下町暮らしをしていたころを懐かしんでこう記している。

下町育ちのカミさんと連れ添ってから二年目だった。東京は山手の、かつては「中流階級」の家庭に育った私。まるで、エリート・インテリの巢窟<sup>98</sup>とでもいうべき個人主義家庭では味わい得なかった<sup>99</sup>。下町の人情<sup>99</sup>にはじめてふれ、人生観とこの世の風景が変ってしまったのも、その頃からだった。山手社会の口先と見てくれだけの<sup>99</sup>だんらん<sup>99</sup>と、下町世相の心からの<sup>99</sup>義理人情<sup>99</sup>との違いを、身に沁みて感じたのも、この時代だった。

まるで、羽田を飛び立つ兄・眞男が吐き出す「ざまあみやがれ」にぶつけたような言葉である。二人の兄と違つて帝国大学には進まなかつたとはいえ、 magari にも高等教育機関に身を置いたのちに物書きになつたのであり、「本来の」であれ「亜」であれ、邦男も「インテリ」に属するといえる。この範疇に入る人が、非インテリの庶民・大衆との接触から何ごとかを学んだり、感じ取ったりすることは珍しいことではない。下町暮らしのほか、軍隊体験もそうした契機となりうるものであった。「大学などでは不可能な農民や鋳夫や店員たちと一緒に短期間ながら同じ兵卒としての暮らしを体験できたこと」を「大切な学問だった」と受け止めた中野卓や「軍隊生活に於て、凡ゆる階級の凡ゆる性格をもつ兵隊達と交渉を持つべく余儀なくされた。私はこれ

によって、社会の人々の多くの面を知らされた様な気がするし、又、私自身が社会の色々な層により、如何に解釈され、如何に受入れられるかもおほよそ解った様な気がする」と考えた大牟羅良などの例もある。丸山眞男にとつて一般兵士との接触の中で「休憩のときに軍歌をうたった」ことなどが「オアシスのように感じ」られることはあったものの、そうした体験は結局、「実にトリヴィアルなものに過ぎない」ものに終わったことはすでに述べた通りである。<sup>(95)</sup>

吉本は、丸山を「学者以外の何ものか、たらしめたのは、戦争体験であった」と論じた。<sup>(94)</sup> 戦争体験のうちでも軍隊における兵士たちとの接触は、学徒兵をはじめとする知識階級に異なる反応をもたらした。「暗くよほど社会的底辺に息づく庶民大衆」をそこに見る者もあれば、反対に「素朴な義理人情を行動原理とする下層出身兵のほうが、倫理的な行動をとる」ことも少なくなく、「敗走中、病気や負傷で落伍してゆく兵隊に、看護のため一緒に落伍していったのは多くそのような兵士たちであった」(判沢弘)という一面を見逃さなかつた者もいた。<sup>(96)</sup> 前者のような見方の典型であったのがまさに丸山であり、このことが丸山のその後の思想の根幹を成した。

筆者の耳に聞こえてきた丸山の言葉は、つまるところ、丸山はヨーロッパ近代に帰依したという「信仰告白」であった。丸山にとつてヨーロッパは特別なものであった。鶴見との対談「普遍的原理の立場」(一九六七年)では、はっきりと言っている。

おまえはヨーロッパの過去を理念化してそれを普遍化している、と言われたら、わたしは、まったくそのとおりと言うほかない。(略)わたしの思想のなかにヨーロッパ文化の抽象化があることを承認します。わたしは、それは人類普遍の遺産だと思います。固くそう信じています。もともととつと学びたい。<sup>(96)</sup>

これは熱烈なる「信仰告白」と受け取るよりほかあるまい。丸山は、ナチスが権力を取り、追い詰められたドイツ社会民主党の党首オットー・ウエルズの演説に深い感銘を受けた。突撃隊員に囲まれた議事堂で、傍聴席に陣取ったナチ党員の野次が飛び交う中で、ウエルズは「この歴史的時間において、私は自由と平和と正義の理念への帰依を告白する……」、「いかなる授権法もこの永遠にして不壊なる理念（略）を減はずことはできない」と述べたことを受けて、丸山は「歴史をこえた何ものかへの帰依なしに、個人が『周囲』の動向に抗して立ちつづけられるだろうか」と問う。これに対する丸山自身の答えは「否」であり、「歴史をこえた何ものか」は丸山にとって西洋近代の思想であった。この点はしばしば丸山批判の論点となってきたが、西洋近代への帰依そのものは、本稿の関心からは問題とすべきものではない。

その一方で、政治学者としての丸山は、ただ理念への帰依だけに生きたわけではなかった。政治とは「悪さ加減の選択」だという福沢諭吉の考えを受けて、政治というものの本質を次のように捉えていた。

政治というものは、本来的に保守的なものです。これは、だから悪いという意味じゃ必ずしもない。大勢の人間の毎日の散文的な要求に答えてゆかねばならない。しかも一つ間違えば、膨大な数の人間に迷惑がかり、極端な場合には生命の危険となる。だから、どうしても冒険よりは安全性を重んじる。<sup>(98)</sup>

このあたりはきわめて現実的である。さて、ヨーロッパ近代に帰依することと日本の現実の「散文的な要求に答え」る政治とは、丸山にとつてどのように結びつくのであろうか。理念への帰依は知識人のものとはなりえても、大衆は思想や理念を深く理解してそれに帰依することはなからう。だからこそ大衆なのである。とりわけ、平和の問題において、先に述べたように丸山は「帝国主義の最後進国であった日本が、敗戦を契機とし



て、平和主義の最先進国に」なるという「二十世紀の最大のパラドックス」と実現することを目指していた。平和とは、国家の存立や独立の問題であるが、また、理念や価値の問題であるより先に、人びとの生き死にや生活の問題であろう。そういういわば「地べた」の問題は、高邁な理念としての平和に直接的に接続するわけではない。そして、「大勢の人間の毎日の」生活から「平和主義の最先進国」への道が「地続き」でなければ、「国家観念自体を革命」するといった思想や理念への帰依によつて跳躍できる知識人ならいざ知らず、一般大衆がその道を歩むことは考えにくい。日々の暮らしと平和国家の理念へとつなぐ具体的な道筋が示されなければならぬはずであるが、そうした道を見つけ出し、あるいは作り出し、それを指し示すことを丸山は自分の仕事とはしなかった。<sup>(9)</sup> そもそもそうした仕事は、大衆と大衆社会を嫌悪する丸山に求めるべきことではないかもしれない。

### おわりに

丸山眞男の残した戦争と平和に関する論文を読み直すための前提作業として、座談における丸山の発言に耳を傾けてきた。時には講演やインタビューも聞いてみた。そうしてみてわかったことは、丸山の戦争体験がそうであったように、丸山の戦争観や平和論はどこまでも知識人のそれであつて、「大勢の人間の毎日の散文的な要求」との接点は見いだせなかつたということである。この点について、筆者がこれまでに読んだ丸山のいくつかの論文には見当たらなかつたが、座談における発言にもその糸口を見いだせなかつたということである。むしろ、座談では、批判の対象ともなつたような大衆嫌悪やエリート主義的な言葉がしばしば発せられていたことが印象に残つた。

「僕は少くも政治的判断の世界においては、高度のプラグマティストでありたい」というよく知られた丸山の姿勢は、少なくとも平和論においては、平和を観念的に語ることに於いてはともかく、丸山が求める平和を日本においてつくりだす上では、十分に発揮されたとはいえない。丸山は決して「象牙の塔」にこもってはかりいたわけではなかった。それでも、「土着的」「日本的」なるものを嫌悪し、ヨーロッパ近代の理念に帰依する丸山と「大勢の人間」との関係は最後まで次のようなものであった。

日本の生活条件が変革されないと、(略)二階にはプラトンからハイデッガーまで並んでいるけれども、階下では相変わらず同じ生活をしていて、二階と階下とをつなぐ階段がどこにあるか解らないというようなことになる。<sup>(10)</sup>

丸山は文字通り「プラトンからハイデッガーまで」に囲まれて暮らしていたわけであるが、「二階と階下とをつなぐ階段」は、すでにどこかにあるものを見つけるのか、それとも新たにどこかに掛けなければならぬのか。いずれにしても、丸山はそのために「日本の生活条件が改革され」なければならぬという。「改善」されるべきは「階下」の生活条件というのである。筆者は、階段を掛けるのは「二階」に住む人間に課せられている仕事であると考え、丸山にもその意識があったはずであるが、丸山と「階下」の人々の関係は、最後までこのままであった。

丸山は晩年、ある時から学生を見る目がなくなつたと回顧していることは先に述べた。また、一九八四年には、「高度成長後にどうなるか」ということは、まったく……、そもそも高度成長を見越してないんですから、これは最も誤った点です。こんなに豊かになるとは思いもよらなかつた」と述べている。<sup>(11)</sup> 学生を理解できなく

なったことと、高度成長とその成果を予見できなかったことは、それぞれが別のことでなく、ひとつにつながっている。そうした自覚は丸山にもあったのではなからうか。「夜店」を疊んだのには、日本政治思想史の研究に専念したいという動機だけでなく、時代と丸山の間を生じた齟齬という必然があったように思われる。丸山は、帰依すべき理念を語り、かつ「階下」のことにもしばしば言及した。だが、「二階」にも解決すべき問題があり、それを抜きに「二階と階下とをつなぐ階段」は掛けられず、平和を語る言葉も「階下」に届かないと筆者は考えるが、丸山はそのことにはあまり関心を示さなかった。

戦後のある時期まで法学をリードした法社会学がいつまでも農山漁村の旧慣調査に明け暮れるのを見て、大学教授の職をなげうって小繋事件に身を投じた戒能通孝は、こんなことを言っていたという。

そんなに遠くにいかなくても調査対象は東大法学部の研究室にいくらでもある。<sup>(16)</sup>

丸山には見られない精神がここにはある。

注

- (42) 「疑似プログラムからの脱却」『座談』四、一〇九ページ。
- (43) 同前、一一四ページ。
- (44) 「現在の政治状況——何を為すべきか」同前、二七三―二七四ページ。
- (45) 「現代における平和の論理」『座談』五、七九―八〇ページ。
- (46) 同前、九二―九三ページ。

- (47) 「この事態の政治学的問題点」『丸山眞男集』第八巻（岩波書店、一九九六年）、二八四ページ。
- (48) 「現代における態度決定」、同前、三一四、三二六ページ。
- (49) 「選択のとき」、同前、三四七、三四八、三五〇ページ。
- (50) 「安保闘争の教訓と今後の大衆闘争——青年労働者の報告をもとにして——」、同前、三二五―三二六ページ。
- (51) 「復初の説」、同前、三五七―三五八ページ。
- (52) これは集会での発言の一部であるが、「二十世紀最大のパラドックス」と題して雑誌『世界』（一九六五年十月）に掲載された。『丸山眞男集』第九巻、二九三ページ。
- (53) 丸山眞男『日本の思想』（岩波書店、一九六二年）、一八四―一八五ページ。
- (54) 前掲「戦争と同時代」『座談』二、二三四ページ。
- (55) 「民主主義の原理を貫くために」『座談』五、二一九ページ。
- (56) 同前、一三二ページ。これは『増補版 現代政治の思想と行動』（みすず書房、一九六四年）の「増補版への後記」の中のあまりにも有名な一節、「私自身の選択についていうならば、大日本帝国の『実在』よりも戦後民主主義の『虚妄』の方に賭ける」と同じことを言っている。同書、五八五ページ。
- (57) 「討論・対決の思想」『座談』七、三〇一―三〇三ページ。
- (58) 同前、三〇三ページ。
- (59) 「夜店と本店と」『座談』九、二九三ページ。
- (60) 「岡義武——人と学問」、同前、二五四ページ。
- (61) 松沢弘陽「あとがき」、『丸山眞男回顧談』下（岩波書店、二〇〇六年）、三二七ページ。
- (62) 『丸山眞男回顧談』下、七六―七七ページ。
- (63) 同前、二二二ページ。
- (64) 同前、二五―二五二ページ。
- (65) 中野、前掲書、二四ページ。

- (66) 竹内洋『革新幻想の戦後史』(中央公論新社、二〇一二年)、四四ページ。
- (67) 『丸山眞男回顧談』下、二二八ページ。
- (68) 同前、二四〇ページ。
- (69) 同前、二八九ページ。
- (70) 『座談』二、二七二―二七三ページ。
- (71) 「丸山眞男氏との一時間」『座談』四、三六ページ。
- (72) 「24年目に語る被爆体験」『丸山眞男手帖』第六号(丸山眞男手帖の会、一九九八年)、一八ページ。
- (73) 同前、一九ページ。丸山は、自身を「広島で生活していた人間というよりも、至近距離にいた傍観者」にすぎないとして、被爆者手帳を申請しなかった。
- (74) 「丸山眞男往復書簡——原爆体験をめぐって——」、同前、三一ページ。これには、被爆の重さのほかに、「小生は『体験』をストリートに出したり、ふりまわすような日本的風土が大きいです。原爆体験が重ければ重いほどそうです」という理由もあった。同前、三一―三二ページ。
- (75) 鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの——鶴見俊輔に戦後世代が聞く』(新曜社、二〇〇四年)。
- (76) 同前、一七一―一八ページ。
- (77) 同前、一八一―一九ページ。
- (78) 鶴見俊輔編『語りつぐ戦後史』I(思想の科学社、一九六九年)、八五ページ。
- (79) 鶴見他『戦争が遺したもの』、二二ページ。
- (80) 同前、一五一ページ。
- (81) 同前、一五二ページ。
- (82) この講演は、東京大学東洋文化研究所主催の東洋文化講座の一環として行われたものであり、翌年、出版された。『丸山眞男集』第三卷、所収。
- (83) 同前、二九六―二九七ページ。

- (84) この部分について、これを収めた『現代政治の思想と行動』への「追記と補註」（一九五六年）で、『消極的抵抗』の過大評価に導きかねない」としている。『丸山眞男集』第六巻、二五五ページ。さらに、戦後における変化を踏まえて認識を修正している。
- (85) 鶴見他『戦争が遺したものの』、一五四—一五五ページ。
- (86) 同前、三二六ページ。
- (87) 同前、一七五、三五—一七六ページ。
- (88) 「丸山先生を囲んで」『座談』七、五一ページ。
- (89) 「日本の近代化と土着」『丸山眞男集』第九巻、三六九ページ。また、次のようにも言っている。「私自身、いわゆる西欧的近代主義者というレッテルをはられることには、一面では光栄でもあり、他面では抗議したい」。同、三七四ページ。
- (90) ベラー (Robert Bellah) は、「丸山は、ヨーロッパ文化こそ『人類普遍の遺産』だと主張して、自らのヨーロッパ中心主義を堂々と肯定した」としているが、日本の詩歌を軽蔑して芭蕉よりもゲーテを好む丸山について、「ヨーロッパの（とりわけドイツの）ものに対する丸山の愛着はほとんど喜劇的でもあった」という。同「学者丸山眞男と友人丸山眞男」「みずず」編集部編『丸山眞男の世界』（みずず書房、一九九七年、五〇ページ。丸山の弟子のひとりである藤原弘達によれば、丸山は、「You are too western minded」（あなたはあまりにも西欧的心情に過ぎる）」と外国の学者から評されていたのである。竹内、「丸山眞男の時代」、二〇五ページより再引用。座談においても、丸山の西欧志向は随所に顔を出す。音楽にしても映画にしてもほとんど欧米のものしか話に出てこない。ペーターヴェンやフルトベングラーなどが盛んに出てくる半面、日本文化を話のなかで取り上げることは少ない。埴谷雄高ら文学者との交流が多く、近代日本文学にも通じてはいるものの、映画でもつばら洋画ばかりで、日本映画はあまり見なかったようで、せいぜい「徳川夢声なんていう天才がいてね」と、サイレント映画時代の弁士を称賛するぐらいである。『座談』八、一六五ページ。
- (91) 丸山邦男『コラムの世界——フリーライターの戦後誌』（日本ジャーナリスト専門学院出版部、一九八一年）、二二三ページ。邦男から見た眞男との関係は次のようなものであった。「西欧教養主義を志向する秀才の次兄〔眞男——引用者〕はペーターベン、モーツアルト、シヨパン、さらに凝ってバッハ、ワグナー等々の洋楽、だったから、東海林〔太郎〕節

や〔広沢〕虎造節をこっそりと求めて蓄音機にのせることは、私なりにかなり気を使った。」丸山邦男『遊撃的マスコミ論——オビニオン・ジャーナリズムの構造』(創樹社、一九七六年)、一七九ページ。

(92) 吉田裕『兵士たちの戦後史』(岩波書店、二〇一年)、二九一ページより再引用。

(93) 「日本の思想における軍隊の役割、(注) 31。丸山の戦争体験について、石田雄も「戦争体験がその後の彼の研究に与えた影響について述べたものは皆無といつてよいだろう」という。同「解説」丸山眞男『丸山眞男戦中備忘録』(日本図書センター、一九九七年)一六八ページ。

(94) 吉本、前掲書、一三ページ。吉本は、「生活によつて大衆であつたものと、思想によつて知識人であつたもの」という対比で、大衆と丸山を位置づけた。同、一五ページ。この評価も多くの論議を呼んだ。

(95) 小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナシヨナリズムと公共性』(新曜社、二〇〇二年)、五五ページ。

(96) 『座談』七、一一——一二ページ。一般に「欧米」とすることが多いが、丸山にはヨーロッパとアメリカは別のものだったようである。「ヨーロッパとアメリカとはまるで違うじゃないかつて反発したくなる。わたしが実際に行つた感じもそうです。つまり、ヨーロッパへ行つたときは未知のところへ来た感じがまるでしなかつたが、アメリカはまったく見当がつかない感じ。」

(97) 「歴史と文化のバターン」、同前、二五六—二五七ページ。

(98) 「民主主義の原理を貫くために」『座談』五、一四一ページ。

(99) 「現代日本の知的世界に切実に不足し、もつとも要求されるのは、ラディカル(根底的)な精神的貴族主義がラディカルな民主主義と内面的に結びつくこと」といった抽象的な話以上のものは、座談でも聞かれなかつた。丸山『日本の思想』、一七九ページ。

(100) 「ある自由主義者への手紙」『丸山眞男集』第四巻、三三二ページ。

(101) 「被占領心理」『座談』二、二二—二二二ページ。

(102) 丸山は学問を仏教にたとえて「在家仏教」を称揚し、「一国の学問をになう力は(略)学問を職業としない、『俗人』の学問活動」であり、「学問的思考を『坊主』の専売から少しでも解放することを目指したといつている。丸山「増補版への

後記』『現代政治の思想と行動』、五八三ページ。

中野、前掲書、二三四ページ。

(104) (103)

「一九六〇年代末の日本の学生たちの間に起こったのは、丸山パラダイムから吉本パラダイムへのシフトであった。かかる移行は、ちょうど日本の学生運動が、六〇年安保までのエリート主義的な後進国型のものから、対抗文化を主張する先進国型のものへと変化したのに対応している。」都築勉『戦後日本の知識人——丸山眞男とその時代』（世織書房、一九九五年）、四四八ページ。

(105)

長谷川正安『法学論争史』（学陽書房、一九七六年）、二九ページ。